

日本のオペラ公演 2022

—公演データの分析とその考察—

昭和音楽大学オペラ研究所・石田麻子

1. はじめに

本稿は、2022年の公演データの分析を通じて、1年間のオペラ公演の傾向を捉えようとするものである。2022年も例年同様の分析項目としているため、2020年、2021年と、コロナ禍の大きな影響を受けた年からの変化が見て取れる。おおむね数字の上では、多くの観点がコロナ禍前の状況に戻りつつあるようだ。ただし、公演の規模や傾向、海外との関係は大きな変化を見せている。それぞれ細かく見ていくことにしよう。

1-1. A表（大規模会場での公演）とB表（中・小規模会場での公演）、C表（セミ・ステージ形式等の公演）の区分【表1】

本稿では、756席以上の大規模会場での公演をA表に、756席未満の中・小規模会場での公演をB表にそれぞれ分けている。基準は、大阪音楽大学ザ・カレッジ・オペラハウスの座席数であり、小学校や中学校等、各学校内の体育館や講堂等での実施分は、本来公演を目的とした場所ではないことを理由に、一律B表の中・小規模公演として分類しているのも例年通りである。

2022年も、総上演回数に加えて、大規模会場でのセミ・ステージ形式や演奏会形式での全幕上演回数と、上演した団体数を掲載している。演出がついた本格上演に限りなく近づいた、演奏的にも優れた上演が多数おこなわれるようになったことが理由である。なお、この数にはハイライトや抜粋形式での公演は含んでおらず、全幕上演のみの数字としている。ただし、具体的なC表掲載公演への言及は、これまでどおり「6. 演奏会形式

など」の項でまとめるにとどめた。

1-2. 国内団体、教育研究団体、海外団体の分類について

（分類について）

「国内団体」公演は、オペラ団体、劇場・音楽堂等、団体や劇場間の共同制作に加えて、高等教育機関などに関連するものであっても学生などが自主的に行う公演はこの分類としている。「教育研究団体」公演は、高等教育機関が主催する教育研究発表を目的としたものや、オペラ団体や劇場・音楽堂等の研修所による研修成果発表などを含んでいる。「海外団体」公演は、海外の歌劇場や音楽祭などの来日によるものである。今回は、「海外団体」公演（表6）のみ、コロナによる中止公演を表に入れた。

（団体数について）

劇場や団体が、他劇場や他団体と共同制作を実施した公演は、当該組織が単独で実施したものと区別したうえで、別団体としてカウントした。さらに同じ団体が組んだ相手を変えて共同制作した場合も別団体として区別しているのも従来どおりである。

2. 日本のオペラ公演 2022年

2-1. 総上演回数と活動団体数の推移【図1】

2022年は、A表（大規模会場公演）とB表（中・小規模会場公演）をあわせた総上演回数が944回と、2021年の620回から大幅に増え、コロナ禍前である2019年の9割弱程度の公演数になり、上演団体数も2019年比で9割強まで回復している。さらにC表のうち、セミ・ステージ形式等での全幕上演回数が66

表1 分析対象と上演団体の区分（○は本稿での分析対象）

	1. 国内団体	2. 教育研究団体	3. 海外団体
A表：大規模会場公演＝756席以上の客席数	○	○	○
B表：中・小規模会場公演＝756席未満の客席数	○	○	○
C表：セミ・ステージ形式等	図1のみ○（総上演回数＋大規模会場でのセミ・ステージ形式等全幕上演のみ）		

図1 総上演回数と活動団体数の推移

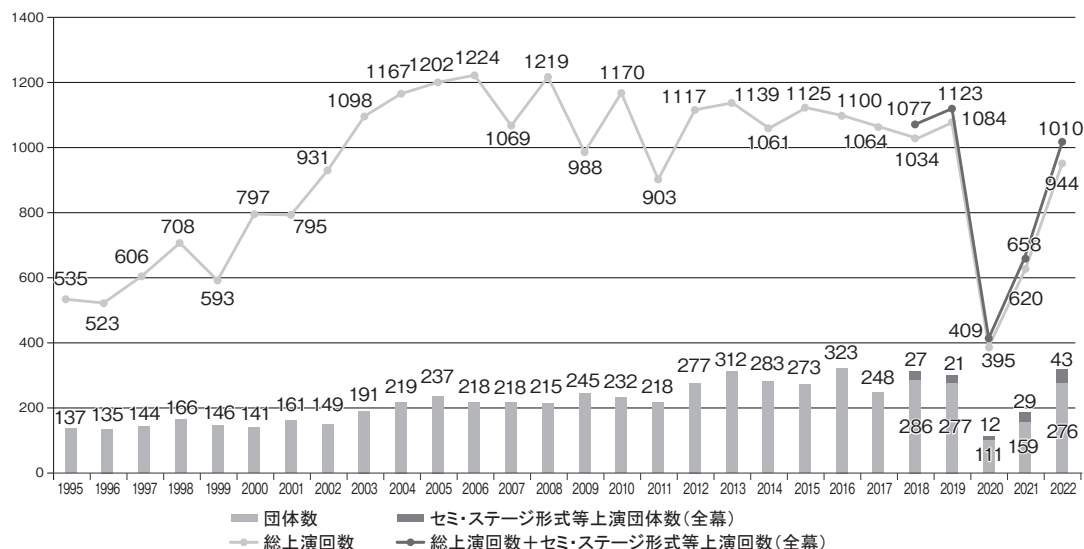


表2 2022年のカテゴリー別オペラ上演団体活動状況一覧

A. 大規模会場（756席以上）			B. 中・小規模会場（756席未満）			合計（A+B）		
カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数	総上演回数	カテゴリー	団体数*	総上演回数
1. 国内団体	85	304	1. 国内団体	179	595	1. 国内団体	257	899
2. 教育研究団体	9	18	2. 教育研究団体	9	13	2. 教育研究団体	17	31
3. 海外団体	2	14	3. 海外団体	0	0	3. 海外団体	2	14
合計／総団体数・総上演回数	96	336/944	合計／総団体数・総上演回数	188	608/944	合計	276	944

*団体数の合計は、A表とB表をあわせて再度集計したもの。同一の団体が規模の異なる会場で公演した場合もあるため、A表とB表を合計した数よりも少なくなる。

回を数え、合計1010回となった。このセミ・ステージ形式等については、全幕上演であって、コンサート形式や演奏会形式、セミ・ステージ形式であるものに限定している。

上演団体数は、2021年は上演団体数が159団体、セミ・ステージ形式等での上演団体は29団体だったが、2022年は上演団体数が276団体、セミ・ステージ形式等での上演団体は43団体（A表とB表に分類されている団体と重複する団体も含む）と大きく増加している。セミ・ステージ形式等での上演団体数

は増加傾向となっており、大規模な舞台での演出を伴わない上演が活況を呈しつつあることが見て取れる。

2-2. カテゴリー別オペラ上演団体活動状況【表2】

表2では、大規模会場公演のA表、中・小規模会場公演のB表に分けて集計している。2022年は、A表が96団体336回、B表が188団体608回となった。2021年には、A表が74団体298回、B表が102団体322回だった状況と比べると、いずれの数も増加、ある

いは大幅に増加しており、とくに、中・小規模会場での上演回数が倍増していることがわかる。これらの数字が、2022年のオペラ公演を象徴するものとなった。

コロナ禍前の、2018年と2019年の状況とも比較してみよう。

2018年は、A表が108団体411回、B表が178団体623回、2019年は、A表が119団体379回、B表が182団体705回だった。

これらの数字から、2022年は大規模公演をおこなう団体数と上演回数の合計はコロナ禍前に戻る途上にあると言えそうだ。ただし、依然として招聘オペラ団体の公演が中止になったりしていることの影響があるように思われる。

一方、中・小規模公演をおこなう団体数は、コロナ禍前と同等、あるいはそれを上回る勢いを見せている。しかし、公演回数が伸び切っていないのは、1団体あたりの公演数が少ないことを示しており、2022年はコロナ禍に対する規制が残っていたこともあって、手探りの状況があったと言えるのかもしれない。

2-3. 国内団体公演【表3、表4-1、表4-2】

表3では、大規模会場で8回以上の公演をおこなった国内団体の活動をまとめており、日本を代表する団体が並んだ。

日生劇場は、「ニッセイ名作シリーズ2022」と題して、《セビリアの理髪師》の学校向け公演を自らの劇場で6回、びわ湖ホールで1回、フェニーチェ堺で1回実施した。同じ演目を一般観客向けの「NISSAY OPERA 2022」として、自らの劇場で2回上演、さらにびわ湖ホールで2回、フェニーチェ堺、やまぎん県民ホールで1回ずつ公演を実施、合計14回公演している。さらに、《ランメルモールのルチア》を「ニッセイ名作シリーズ2022」で4回の学校向け公演を、

「NISSAY OPERA 2022」として一般公演を2回実施した。

東京二期会は、2021年はコロナ禍で延期していた公演を実施したり、若手公演が入っていたりしたため、6作品と上演作品が多かったのだが、2022年は大規模な会場での公演は4作品だった。いずれも1プロダクションあたりの公演数が4回～6回と比較的多いことが特徴である。《フィガロの結婚》は、演出家等の入国制限のために延期となった《影のない女》から緊急対応で変更実施された公演で、そのほか《パルジファル》《蝶々夫人》《天国と地獄》の大型公演をおこなった。

日本オペラ振興会は、藤原歌劇団が《イル・トロヴァトーレ》《イル・カンピエッロ》《蝶々夫人》《コジ・ファン・トゥッテ》《トスカ》、日本オペラ協会は《ミスター・シンデレラ》が大規模な会場での公演である。

兵庫県立芸術文化センターが、《夕鶴》《ラ・ボエーム》で、劇場外での公演も含めると合計11回と回数を伸ばした。

滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールは、セミ・ステージ形式での上演に特徴がある年となっており、そのほかにはびわ湖ホール声楽アンサンブルを中心に配役した《ファルスタッフ》を上演したことが記録された。

オペラシアターこんにゃく座は、2020年の103回から、2021年には155回、2022年には150回となっており、学校公演などが再開、定着してきたことを要因に、公演回数が増えてきている。

表4-1と4-2では、新国立劇場の公演をまとめている。

自劇場での公演は50回、そのうち新制作が《オルフェオとエウリディーチェ》《ペレアスとメリザンド》《ジュリオ・チェーザレ》《ボリス・ゴドゥノフ》の4演目で、それぞれ特徴のある作品をとりあげる上演となったため、劇場のプログラムの幅を大きく広げた。

表3 2022年の国内団体公演活動データ*1

団体名	上演作品	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		合計
		上演回数	合計	上演回数	合計	
オペラシアター こんにゃく座	あん	0	53	12	97	150
	ネズミの涙	30		5		
	タンゲーまほうをかけられた舌ー	2		27		
	森は生きている	14		25		
	口はロボットの口	5		19		
	ルドルフとイッパイアッテナ	0		6		
	さよなら、ドン・キホーテ！	2		3		
日生劇場*2	セビリアの理髪師	14	20	0	0	20
	ランメルモールのルチア	6		0	0	
東京二期会	フィガロの結婚	6	18 + [2]	0	4	22 + [2]
	パルジファル	4		0		
	蝶々夫人	4		0		
	天国と地獄	4		4		
	雪の女王	0		0		
	【エドガール】 (セミ・ステージ形式)	[2]		0		
藤原歌劇団*3	イル・トロヴァトーレ	3	13 + [2]	0	6	24 + [2]
	イル・カンピエッロ	3		1		
	蝶々夫人	3		0		
	コジ・ファン・トゥッテ	3		0		
	トスカ	1		5		
	助けて、助けて、宇宙人がやって来た！	0		0		
	【ジュリエッタとロメオ】 (セミ・ステージ形式)	[2]		0		
日本オペラ協会*3	ミスター・シンデレラ	2	2	0	3	
	咲く～～もう一度、生まれ変わるために	0		3		
兵庫県立芸術文化センター	夕鶴*4	3	11	0	0	11
	ラ・ボエーム	8		0	0	
滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール	ファルスタッフ	4	8 + [5]	0	16	24 + [5]
	泣いた赤おに*5	4		16		
	【竹取物語】(セミ・ステージ形式)	[2]		0		
	【パルジファル】 (セミ・ステージ形式)	[2]		0		
	【ジャンニ・スキッキ】 (演奏会形式)	[1]		0		
上位 団体合計上演回数／ 総上演回数	—	—	125/336 [9]	—	126/608	251/944 [9]

*1 大規模会場で8回以上の上演を実施した団体。大規模会場での総上演回数の合計順。共催公演、共同制作公演を含む。

*2 日生劇場はこのほか《コジ・ファン・トゥッテ》を藤原歌劇団との共催公演、《天国と地獄》を東京二期会との提携公演として実施。これらは今年からは日生劇場の表には入っていない。

*3 藤原歌劇団と日本オペラ協会は、(公財)日本オペラ振興会内のオペラ団体。

*4 《夕鶴》3回のうち1回は東大阪市文化創造館 Dream House 大ホールでの上演。

*5 びわ湖ホール声楽アンサンブルの《泣いた赤おに》公演も、びわ湖ホールが制作したためここには含めている。

表 4-1 2022 年新国立劇場主催のオペラ公演（新国立劇場オペラパレスおよび中劇場：大規模会場公演、特記がなければ主催は新国立劇場）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
1~2月	さまよえるオランダ人	R. ワーグナー	4	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2021/2022 シーズンオペラ	全 3 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
2月	愛の妙薬	G. ドニゼッティ	4	令和2年度文化庁文化芸術振興費補助金 子供文化芸術活動支援事業（劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業）beyond 2020 プログラム 新国立劇場 2021/2022 シーズンオペラ	全 2 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
3月	椿姫	G. ヴェルディ	5	beyond2020 プログラム 新国立劇場 2021/2022 シーズンオペラ	全 3 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
4月	ばらの騎士	R. シュトラウス	4	令和 3 年度補正予算文化庁 ARTS for the future! 2 新国立劇場 2021/2022 シーズンオペラ	全 3 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
4月	魔笛	W.A. モーツァルト	5	新国立劇場 2021/2022 シーズンオペラ	全 2 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
5月	オルフェオとエウリディーチェ	C.W. グルック	3	新国立劇場 2021/2022 シーズンオペラ	新制作 / 全 3 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
7月	ペレアスとメリザンド	C. ドビュッシー	5	新国立劇場 2021/2022 シーズンオペラ	新制作 / 全 5 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
7月	蝶々夫人	G. プッチーニ	6	令和 4 年度日本博主催・共催型プロジェクト 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室 2022	主催：（公財）新国立劇場運営財団 / （独）日本芸術文化振興会 / 文化庁 全 2 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
10月	ジュリオ・チェーザレ	G.F. ヘンデル	4	令和 4 年度（第 77 回）文化庁芸術祭主催公演 新国立劇場 2022/2023 シーズン開幕公演	主催：文化庁芸術祭執行委員会 / 新国立劇場 新制作 / 全 3 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
11月	ボリス・ゴドゥノフ	M. ムソルグスキー	5	文化庁委託事業「令和 4 年度戦略的芸術文化創造推進事業」令和 4 年度（第 77 回）文化庁芸術祭協賛公演 新国立劇場 2022/2023 シーズンオペラ 開場 25 周年記念公演	主催：文化庁 / 新国立劇場 新制作 / プロローグ付全 4 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
12月	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	5	新国立劇場 2022/2023 シーズンオペラ	全 2 幕 / 日本語・英語字幕付原語上演
—	11 作品	10 人	50/336	—	—

表 4-2 2022 年新国立劇場主催のオペラ公演（他会場での公演：大規模会場公演）

上演月	作品名	作曲家名	上演回数	公演タイトル	特記事項
10月	蝶々夫人	G. プッチーニ	2	令和 4 年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業 新国立劇場 高校生のためのオペラ鑑賞教室 2022	京都市 / ロームシアター京都（（公財）京都市音楽芸術文化振興財団） / 新国立劇場 全 2 幕 / 字幕付原語上演
—	1 作品	1 人	2/336	—	—

レパートリーとして定着したプロダクションとの作品バランスをとりながら、シーズンが構成されたことが見て取れる。また、実施にあたっては、令和 2 年度文化庁文化芸術振興

費補助金「子供文化芸術活動支援事業（劇場・音楽堂等の子供鑑賞体験支援事業）」や、令和 3 年度補正予算文化庁「ARTS for the future! 2」「令和 4 年度日本博主催・共催型プ

表5 2022年の教育研究団体公演活動データ*1

団体名	作品名	作曲家名	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		実施公演
			上演回数	合計	上演回数	合計	
新国立劇場 オペラ研修所	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	3	5	0	0	5
	領事	G.C. メノッティ	2		0		
大阪音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	2	2	0	1	3
	魔笛	W.A. モーツァルト	0		1		
大阪芸術大学	魔笛	W.A. モーツァルト	2	2	0	1	3
	秘密の結婚	D. チマローザ	0		1		
国立音楽大学	ドン・ジョヴァンニ	W.A. モーツァルト	2	2	0	0	2
昭和音楽大学	フィガロの結婚	W.A. モーツァルト	2	2	0	0	2
東京藝術大学	コシ・ファン・トゥッテ ～女はみんなこうしたもの ～あるいは～恋人たちの学校	W.A. モーツァルト	2	2	0	0	2
6 団体	6 作品	3 人	—	15/336	—	2/608	17/944

*1 大規模会場で、教育研究型公演の開催実績が2回以上ある団体。合計および50音順の掲載。学生主催公演やゼミ単位の公演、有志による公演などは含まない。

表6 2022年海外団体*1の公演活動データ（A. 大規模会場）

形態*2	上演月	国名	劇場名	上演作品名	作曲家名	上演回数	合計 / 総上演回数	開催都市数
拠点 (中止*3)	6 月	イタリア	パレルモ・マッシモ劇場	ラ・ボエーム	G. プッチーニ	(5)	(7)	(4)
				シモン・ボッカネグラ	G. ヴェルディ	(2)		(1)
その他	10 月	イタリア	エウローパ・ガラランテ	シッラ	G.F. ヘンデル	(2)	2	1
巡回	10～11 月	ハンガリー	ハンガリー国立歌劇場	魔笛	W.A. モーツァルト	12	12	11
—	—	2ヶ国 (1ヶ国中止)	2 団体 (1 団体中止)	2 作品 (2 作品中止)	2 人 (2 人中止)	14 (7 回中止)	14/944 (7 回中止)	12 都市 (4 都市中止)

*1 劇場名は、主催者表記に準じる。

*2 都市の数え方は、東京23区はそれ以外の東京都内の市と分けて1都市とし、東京都以外は原則市区町村別に各1都市として区別する。
例：東京文化会館、府中の森芸術劇場での開催の場合、横浜市と横須賀市で開催の場合などは、異なる2都市での開催とする。
「拠点」：1回の来日で、4都市以下での公演を行う「拠点型」の歌劇場公演。
「巡回」：1回の来日で、5都市以上で公演を行う「巡回型」の歌劇場公演
「その他」：音楽祭、合唱団などの芸術団体、実行委員会やプロジェクト等による公演。いわゆる歌劇場全体の引越し公演とは異なる形態もある。

*3 中止公演は実施予定が発表済の公演のみを掲載している。そのため公式発表されていなかった公演については収録していない。

プロジェクト」、文化庁委託事業「令和4年度戦略的芸術文化創造推進事業」などの補助金が活用されている。

2-4. 教育研究団体公演【表5】

教育研究団体公演は、新国立劇場オペラ研修所や、各音楽大学の教育研究成果の発表公演が並んだ。各組織での教育研究成果の発表公演が戻ってきたことがわかる。演目はモーツァルト作品がほとんどで、若い歌手や器楽奏者たちにオペラ作品演奏をつうじて、アンサンブルを習得させようとする意図であろう。このほかに有志公演などもおこなわれる

など、各音楽大学は、場所や人・組織を備えた劇場同様の機能を持っているとも言える。

2-5. 海外団体公演と中止、延期公演【表6】

表6のとおり、「巡回型」「その他」のカテゴリーで実施された公演があった一方で、国外からの入国制限措置などの結果、中止・延期となった公演もあった。年の前半に一度も海外団体の公演がおこなわれなかったのは、厳しい制限が原因だと考えてよいだろう。この海外団体公演のカテゴリーが、コロナ禍の影響を受け、もっとも回復に遅れが出ていると言える。そしてようやく10月に入り公演がお

こなわれるようになった。海外団体公演は、これまで圧倒的な規模や内容で公演がおこなわれることが多く、我が国のオペラ界を形作るファクターであり続けてきた。それもある、今後の動向が注目されるところである。

3. 指揮者と演出家

(指揮者)

2022年に登場した指揮者は、国内外あわせて165人。そのうち、海外の指揮者は15人、日本人指揮者は150人となった。

海外から来日する指揮者は、特定のプロダクションへの招聘が多いため、「巡回型」の招聘オペラ公演を除いて、一人の登場回数がさほど多くならないのが常である。ところが2022年は、コロナによる入国制限などの理由で出演をキャンセルせざるを得なかった海外の指揮者のかわりに、他団体の公演のために既に来日していたガエタノ・デスピノーサが、新国立劇場の《さまよえるオランダ人》と《愛の妙薬》の2つのプロダクションに急遽続けて登場して8回、九州交響楽団での《外套》(演奏会形式)でも代理で指揮をしており、あわせると合計9回指揮をした。ハンガリー国立歌劇場の《魔笛》12回公演は、ヤーノシュ・コヴァーチとシャームエル・チャバ・トートが6回ずつ振った。

日本人は、大規模会場で振る機会が多かった指揮者を順にあげていこう。沼尻竜典が、日生劇場の《セビリアの理髪師》で、14回で最多となった。沼尻はこのほかにも、びわ湖ホールで、自作の《竹取物語》と《パルジファル》を、セミ・ステージ形式でとりあげている。園田隆一郎は、12回登場した。東京文化会館の《ショパン》1回が中・小規模会場だったのを除けば、藤沢市民オペラ制作委員会の《ナブッコ》と《ラ・ボエーム》、北海道二期会の《皇帝ティトの慈悲》、びわ湖ホールの《ファルスタッフ》を振っている。次が

10回の大野和士、佐渡裕、川瀬賢太郎である。大野が新国立劇場で《ペレアスとメリザンド》《ボリス・ゴドゥノフ》を合計10回、佐渡は兵庫県立芸術文化センターの《ラ・ボエーム》とオペラ de 神戸の《椿姫》で10回、川瀬が東京二期会の《フィガロの結婚》、藤原歌劇団の《コジ・ファン・トゥッテ》、ひろしまオペラ・音楽推進委員会制作の《ドン・ジョヴァンニ》で10回指揮した。

(演出家)

2022年は、共同演出も含めると、海外の演出家は17人、国内は156人と1つのチーム(韓国・朝鮮と日本チーム)が演出している。2021年は、海外の演出家が16人、国内の演出家が108人と2つのチームだったので、とくに国内の演出家数の増加が顕著である。

海外の演出家は、「巡回型」公演のハンガリー国立歌劇場《魔笛》を演出したミクローシュ・シネタールが12回、兵庫県立芸術文化センターの《ラ・ボエーム》を演出したダント・フェレッティが8回となった。

日本人演出家は、大規模会場および中・小規模会場での公演も含めると、中村敬一が50回で最多だった。そのうち大規模会場での公演は13回で、鳥取オペラ協会/とりアートオペラ公演実行委員会制作の《ドン・ジョヴァンニ》、横浜シティオペラ《ルサルカ》などがある。真鍋卓嗣がオペラシアターこんにゃく座《森は生きている》の公演で39回演出しており、そのうち14回は大規模会場での公演である。次いで、岩田達宗が大規模会場で藤沢市民オペラ制作委員会《ナブッコ》、兵庫県立芸術文化センター《夕鶴》、「樋口達哉のオペラ」実行委員会《道化師》、藤原歌劇団《コジ・ファン・トゥッテ》、ひろしまオペラ・音楽推進委員会《ドン・ジョヴァンニ》、北海道二期会《皇帝ティトの慈悲》で15回、中・小規模会場で11回の合計26回となった。栗國淳は日生劇場の《セビリアの

表7 オペラ作品、作曲家別の上演回数

	海外の作品			日本の作品			合計		
	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	上演回数	作曲家数	作品数	総上演回数
2004年	49人	99作品	753回	43人	61作品	414回	92人	160作品	1167回
2005年	57人	111作品	826回	50人	60作品	376回	107人	171作品	1202回
2006年	47人	100作品	800回	50人	71作品	424回	97人	171作品	1224回
2007年	55人	105作品	721回	41(46)人	59作品	352回	96(101)人	164作品	1073回
2008年	50(51)人	107作品	782回	51(52)人	70作品	437回	101(103)人	177作品	1219回
2009年	49(50)人	99作品	653回	48(49)人	48作品	335回	97(99)人	147作品	988回
2010年	42(44)人	86作品	654回	41人	59作品	516回	83(85)人	145作品	1170回
2011年	38人	88作品	530回	34(36)人	51作品	373回	72(74)人	139作品	903回
2012年	51(52)人	97作品	636回	55(56)人	75作品	481回	106(108)人	172作品	1117回
2013年	41(45)人	99作品	675回	56(59)人	83作品	464回	97(104)人	184作品	1139回
2014年	44人	87作品	607回	50(52)人	84作品	454回	94(96)人	171作品	1061回
2015年	44(45)人	89作品	690回	58(61)人	84作品	435回	102(106)人	173作品	1125回
2016年	51(53)人	99作品	669回	52人	86作品	431回	103(105)人	185作品	1100回
2017年	41人	85作品	607回	54人	83作品	458回	95人	168作品	1065回
2018年	44人	85作品	640回	53人	84作品	394回	97人	169作品	1034回
2019年	50人	103作品	658回	54人	85作品	426回	104人	188作品	1084回
2020年	24人	51作品	179回	27人	41作品	216回	51人	92作品	395回
2021年	38(39)人	74作品	337回	36人	51作品	283回	74(75)人	125作品	620回
2022年	44(45)人	94作品	488回	58(62)人	86作品	456回	102(107)人	180作品	944回

* () 内は、共作者・編曲者等を入れた場合の数字。同一人物が作曲や編曲で登場する場合は、1人としてカウント。

理髪師》、藤原歌劇団《イル・トロヴァトーレ》、新国立劇場オペラ研修所の《ドン・ジョヴァンニ》で合計20回、宮本亜門が東京二期会の《フィガロの結婚》《パルジファル》で合計10回を数えた。

4. オペラ作品と作曲家【表7】

作品数と作曲家数、上演回数は、日本のオペラ作品に関しては、コロナ禍以前の2019年の状況に戻り、あるいはそれ以上の数字が記録されている。海外作品については、2019年よりは少ない状況だが、海外、日本の作曲家、オペラ作品の数字をそれぞれ合計すると2019年の数字まで戻っている。

4-1. 海外のオペラ作品と作曲家【表8-1、表8-2】

上位10作品を表8-1でとりあげている。《魔笛》《蝶々夫人》《フィガロの結婚》など、例年

同様の作品が並んだ。2021年に比べると、これらの名作の大規模会場での公演数が96回から126回へ、中・小規模会場での公演数も52回から94回へと増えていることがわかる。2022年に総上演回数が増えていることと連動したようだ。2022年のこのほかの特徴は、《電話》がランクインしていることである。規模の小さな会場で取り上げやすく、歌手の主催するコンサートなどで頻繁に上演される作品である。コロナ禍を経て、小規模な公演が増えたことが要因であろう。

表8-2は上演回数が上位の作曲家リストだが、ここでもメノッティがあがった。2022年は、先述の《電話》だけではなく、《アマールと夜の訪問者たち》《助けて、助けて、宇宙人がやって来た！》など、複数の作品が上演されている。このほかには、ロッシーニが《セビリアの理髪師》を中心に、日生劇場ほ

かの組織で上演されて、ランクインしている。

4-2. 日本のオペラ作品と作曲家【表9-1、表9-2】

オペラシアターこんにゃく座を中心に、特定の団体が集中してとりあげている作品が例年通り並んでいる。そのほか、《泣いた赤おに》《夕鶴》《あまんじゃくとうりこひめ》《おこんじょうり》など、複数の団体が上演している作品は、日本のオペラ作品のレパートリーとして定着しているものばかりだ。2022年は、《夕鶴》以外の作品は、学校公演で多くとりあげられている。これは、作品の魅力に加えて、字幕や大がかりな舞台装置をつかわなくても、子供たちが理解しやすいことなども理由であろう。

5. 上演地域の分布と会場別データ【表10、表11、図2、表12】

表10は、各都道府県で実施された国内団体、教育研究団体、海外団体の数字をまとめたものである。2022年には、秋田県での公演が確認できなかった。ただしアトリオン音楽ホールで《カルメン》ハイライト公演がおこなわれているため、まったくの空白県となったわけではない。

栃木県が上位に入ったのは、オペラシアターこんにゃく座の学校公演が回数を重ねたためである。また、例えば2021年は広島が15位だったのが2022年は10位に入っていることに気がつく。同県は、2021年にはコロナ禍での規制にともない公演中止となった事例のあったことが思い起こされる。

表11では、会場規模ごとに都道府県別上演回数を示している。大規模会場での上演回数は21会場で131回と東京が突出しており、神奈川が11会場で27回、埼玉が8会場で14回となったことが目立ち、首都圏に集中している状況がわかる。さらに関西圏では、兵庫

が3会場で16回、滋賀が4会場で12回などとなっている。

図2は、こうした状況をグラフ化して経年変化が見て取れるように示している。

表12は、各会場別の上演回数を整理したもので、東京の3つの会場が上位を占めている状況であることがわかる。東京は、これ以外にも各市の設置した公共ホールなどでの市民オペラ公演や教育研究機関の公演などが数多くおこなわれていることから、上演回数が多くなっている。このほかには、地域の中核となっている道県の会場の名前があがった。

6. 演奏会形式など

2022年は、446回の演奏会形式、セミ・ステージ形式、ハイライト公演などが記録された。この数字は、掲載基準に適しているか、一つひとつ判断しながらのもので、ハイライト公演をうたっている、オペラ作品をごく一部とりあげた場合などは、この数には入っていないことをお断りしておかなければならない。

「日本のオペラ2022」(47-48pp.)でも言及したとおり、演奏会形式やセミ・ステージ形式であっても、日本のオペラ公演史において、非常に重要な意味を持つ上演が数多くおこなわれている。演出のつかない演奏会形式だからこそ、取り上げることが可能になった演目も少なくない。歌唱や演奏する側だけではなく、聴く側にとっても音楽に集中できる場合もある。オペラとしての総合性には欠けるものの、オーケストラ主催公演などに優れた演奏があったことも考えると、やはり重要なカテゴリーとして見続けていく必要があると思う。

7. まとめ

2022年は、コロナ禍以降、ようやく通常公演が実施できるようになっていく様子が、

表 8-1 2022 年に日本で上演された海外のオペラ作品

(大規模会場での上演実績のあるもの、全 94 作品中・上位 10 作品、タイトルは便宜的に統一)

No.	作品名	作曲家名	A. 大規模会場	B. 中・小規模会場	合計
1	《魔笛》	W.A. モーツァルト	26	8	34
2	《電話》	G.C. メノッティ	1	25	26
3	《ドン・ジョヴァンニ》	W.A. モーツァルト	18	7	25
4	《蝶々夫人》	G. プッチーニ	16	6	22
5	《フィガロの結婚》	W.A. モーツァルト	15	5	20
5	《カルメン》	G. ビゼー	10	10	20
7	《椿姫》	G. ヴェルディ	11	8	19
8	《セヴィリアの理髪師》	G. ロッシーニ	14	4	18
8	《こうもり》	J. シュトラウス二世	9	9	18
8	《コジ・ファン・トゥッテ》	W.A. モーツァルト	6	12	18
合計 / 総上演回数	—	—	126/336	94/608	220/944

表 8-2 2022 年に日本で作品が上演された海外の作曲家 (全 44 人中、上位 7 人)

No.	作曲家名	上演回数
1	W.A. モーツァルト	107
2	G. プッチーニ	63
3	G. ヴェルディ	51
4	G.C. メノッティ	43
5	G. ドニゼッティ	28
6	G. ロッシーニ	22
7	G. ビゼー	21
合計 / 総上演回数	—	335/944

表 9-1 2022 年に国内で上演された日本のオペラ作品 (A. 大規模会場) *大規模会場で、上演回数 5 回以上の作品。

No.	作品名	作曲家名	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	ネズミの涙	萩 京子	30	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場 で 5 回公演あり
2	森は生きている	林 光	14	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場 で 25 回公演あり
3	泣いた赤おに	松井 和彦	5	2	びわ湖ホール声楽アンサンブル/ オフィスノイ	中・小規模会場 で 21 回公演あり
4	口はロボットの口	萩 京子	5	1	オペラシアターこんにゃく座	中・小規模会場 で 19 回公演あり
5	夕鶴	團 伊玖磨	5	2	兵庫県立芸術文化センター/ 東京芸術劇場ほか	—
合計 / 総上演回数			59/336	—	—	—

表 9-2 2022 年に国内で上演された日本のオペラ作品 (B. 中・小規模会場)

*中・小規模会場で、上演回数 20 回以上の作品。

No.	作品名	作曲家名	上演回数	上演団体数	公演団体	備考
1	トラの恩返し	李 在浩	48	1	オペレッタ劇団ともしび	—
2	あまじやくとうりこひめ	林 光	31	8	東京合唱協会ほか	—
3	タンゴ 一まほうをかけられた舌	萩 京子	27	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場 で 2 回公演あり
4	森は生きている	林 光	25	1	オペラシアターこんにゃく座	大規模会場 で 14 回公演あり
5	おこんじょうるり	林 光	24	2	堺シティオペラ / ミラマー レ・オペラ	—
6	泣いた赤おに	松井 和彦	21	5	西日本オペラ協会「コンセル・ ビエール」ほか	大規模会場 で 5 回公演あり
合計 / 総上演回数			176/608	—	—	—

表 10 2022 年の都道府県別上演回数

No.	都道府県名	国内団体		教育研究団体		海外団体		合計		
		団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	団体数	上演回数	上演回数順位
1	北海道	7	16	0	0	0	0	7	16	15
2	青森	2	2	0	0	0	0	2	2	36
3	岩手	1	1	0	0	0	0	1	1	43
4	宮城	5	6	0	0	0	0	5	6	25
5	秋田	0	0	0	0	0	0	0	0	—
6	山形	2	2	0	0	0	0	2	2	36
7	福島	1	2	0	0	0	0	1	2	36
8	茨城	4	5	0	0	0	0	4	5	30
9	栃木	5	23	0	0	0	0	5	23	8
10	群馬	5	7	0	0	1	1	6	8	22
11	埼玉	18	37	0	0	0	0	18	37	5
12	千葉	9	16	0	0	1	1	10	17	14
13	東京	106	341	3	9	1	3	110	353	1
14	神奈川	19	73	3	5	2	3	24	81	2
15	新潟	4	6	0	0	0	0	4	6	25
16	富山	2	3	0	0	0	0	2	3	32
17	石川	5	12	0	0	0	0	5	12	19
18	福井	1	1	0	0	0	0	1	1	43
19	山梨	5	8	0	0	0	0	5	8	22
20	長野	6	10	0	0	1	1	7	11	20
21	岐阜	6	9	0	0	0	0	6	9	21
22	静岡	8	13	0	0	0	0	8	13	17
23	愛知	16	33	2	4	1	1	19	38	4
24	三重	2	3	0	0	1	1	3	4	31
25	滋賀	4	26	0	0	1	1	5	27	7
26	京都	9	18	2	3	0	0	11	21	10
27	大阪	13	40	3	7	1	1	17	48	3
28	兵庫	15	35	1	1	0	0	16	36	6
29	奈良	1	2	0	0	0	0	1	2	36
30	和歌山	1	2	0	0	0	0	1	2	36
31	鳥取	2	2	0	0	0	0	2	2	36
32	島根	1	6	0	0	0	0	1	6	25
33	岡山	2	2	1	1	0	0	3	3	32
34	広島	10	20	1	1	0	0	11	21	10
35	山口	2	3	0	0	0	0	2	3	32
36	徳島	2	2	0	0	0	0	2	2	36
37	香川	3	6	0	0	0	0	3	6	25
38	愛媛	2	3	0	0	0	0	2	3	32
39	高知	1	1	0	0	0	0	1	1	43
40	福岡	4	14	0	0	1	1	5	15	16
41	佐賀	3	13	0	0	0	0	3	13	17
42	長崎	7	18	0	0	0	0	7	18	13
43	熊本	6	19	0	0	0	0	6	19	12
44	大分	4	8	0	0	0	0	4	8	22
45	宮崎	1	1	0	0	0	0	1	1	43
46	鹿児島	6	23	0	0	0	0	6	23	8
47	沖縄	2	6	0	0	0	0	2	6	25
合計	—	—	899	—	31	—	14	—	944	—

表 11 2022 年の都道府県別・地域別、公演会場規模別分布

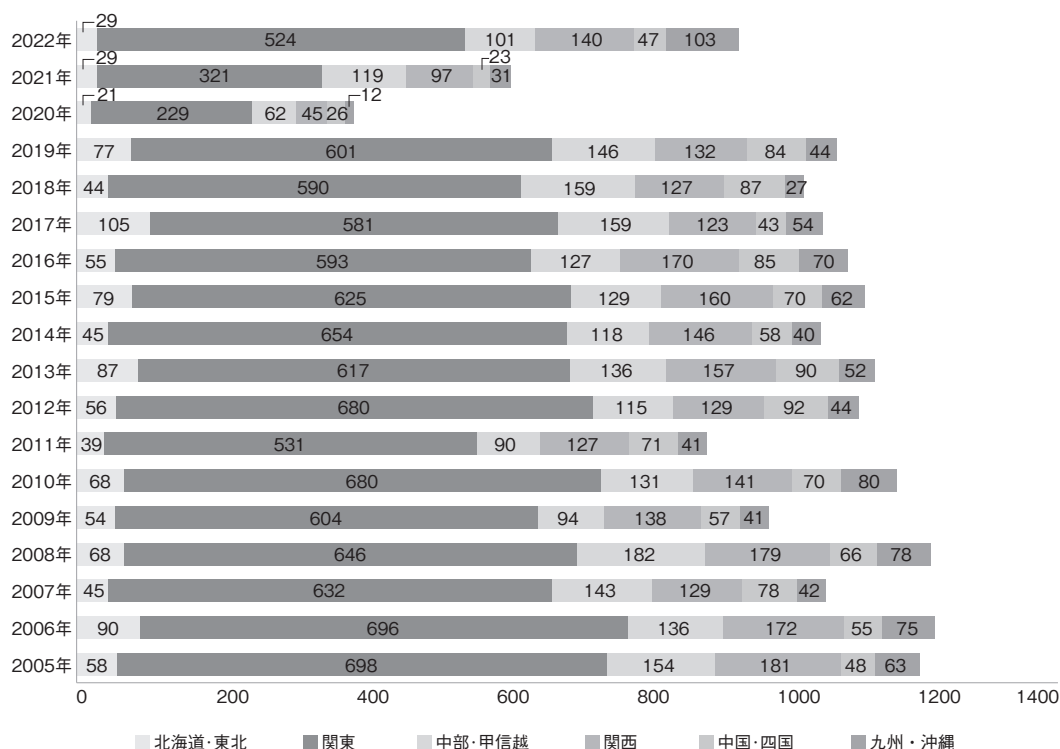
都道府県名	A. 大規模会場		B. 中・小規模会場		上演回数比率	地域
	会場数	上演回数	会場数	上演回数	総上演回数	
北海道	1	6	6	10	3.07%	北海道・東北
青森	2	2	0	0		
岩手	1	1	0	0		
宮城	2	2	1	4		
秋田	0	0	0	0		
山形	1	1	1	1		
福島	0	0	2	2		
地域合計	7	12	10	17	29	
茨城	2	2	2	3	55.51%	関東
栃木	6	16	6	7		
群馬	3	4	3	4		
埼玉	8	14	11	23		
千葉	2	3	8	14		
東京	21	131	73	222		
神奈川	11	27	23	54		
地域合計	53	197	126	327	524	
新潟	3	4	2	2	10.70%	中部・甲信越
富山	1	1	2	2		
石川	2	2	5	10		
福井	1	1	0	0		
山梨	2	3	3	5		
長野	3	8	2	3		
岐阜	3	3	4	6		
静岡	4	7	5	6		
愛知	2	5	13	33		
地域合計	21	34	36	67	101	
三重	2	3	1	1	14.83%	関西
滋賀	4	12	12	15		
京都	5	9	8	12		
大阪	6	10	23	38		
兵庫	3	16	10	20		
奈良	0	0	1	2		
和歌山	0	0	2	2		
地域合計	20	50	57	90	140	
鳥取	1	2	0	0	4.98%	中国・四国
島根	2	5	1	1		
岡山	1	1	2	2		
広島	3	7	5	14		
山口	2	2	1	1		
徳島	1	1	1	1		
香川	1	4	1	2		
愛媛	0	0	2	3		
高知	0	0	1	1		
地域合計	11	22	14	25	47	
福岡	2	5	8	10	10.91%	九州・沖縄
佐賀	1	3	8	10		
長崎	2	2	11	16		
熊本	1	2	14	17		
大分	1	2	6	6		
宮崎	0	0	1	1		
鹿児島	2	6	10	17		
沖縄	1	1	4	5		
地域合計	10	21	62	82	103	
合計	122	336	305	608	944	—

同一館内の複数の会場、同一大学内の複数の会場は、規模別に1カ所とした。

例：新国立劇場オペラ劇場、新国立劇場中劇場は大規模会場で1カ所。新国立劇場小劇場は中・小規模会場で1カ所。

地域別上演回数の合計で上位3地域に背景色をつけている。

図2 地域別総上演回数推移（単位・回）



数字のうえて見て取れたように感じられる。しかしながら、規模や内容を見ると、室内オペラ、小規模な会場での公演、演奏会形式などが増えたことが数字に影響していると言ってよさそうだ。一方で、大規模な海外招聘オペラは、コロナ禍前からすでに回数の上では一時期のような盛り上がりには欠ける傾向にあったとはいえ、その頃の数字にすら戻らずという状況にある。国内外の社会環境がとくに影響しやすい公演形態であり、今後の社会情勢がどのように作用するのか、引き続き見ていくことになるだろう。

毎年のオペラ公演を記録していく行為は極めて地道なものである。様々な手段で、エビデンスを収集しながらオペラ研究所の総力をあげて集計しており、公演環境の変化を直接感じ取りながら、年鑑の発行を続けている。とりわけ、2020年から2022年の編纂作業

は、コロナ禍によりオペラ界にとって、もっとも厳しい環境に置かれていると実感しながらのものとなった。だからこそ、冷静に取り組む必要があったとも言える。これまでとは異なる視点を取り入れ、危機を記録するための特集記事をいくつも企画してきたのは、そうしたことが理由である。あらためて、毎年の公演情報を正しく保存し、まとめ、公表していくことの意味を強く感じている。

本年鑑での記録事業が今後オペラのみならず、音楽界の新たな展開への一助となるように願ってやまない。

（本稿のデータ分析後に判明した公演記録があるため、巻末の公演記録と若干の相異点があることをお断り致します。）

表 12 2022 年の会場別総上演回数 (A. 大規模会場で 5 回以上開催の会場。[] 内は同一施設内の B. 中・小規模会場)

順位	都道府県	会場名	国内団体	教育研究団体	海外団体	小計	総上演回数	客席数(席)
1	東京都	新国立劇場オペラ劇場	58	0	0	58	67	1,814
		新国立劇場中劇場	4	5	0	9		1,038
2	東京都	日生劇場	21	0	0	21	21	1,330
3	東京都	東京文化会館 大ホール	11	0	2	13	13	2,303
		東京文化会館 小ホール	[2]	0	0	[2]		[649]
4	兵庫県	兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール	10	0	0	10	12 [1]	2,001
		兵庫県立芸術文化センター 阪急 中ホール	2	0	0	2		800
		兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院 小ホール	[1]	0	0	[1]		[417]
5	栃木県	鹿沼市民文化センター 大ホール	10	0	0	10	10	1,302
6	滋賀県	滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 大ホール	3	0	1	4	8	1,848
		滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 中ホール	4	0	0	4		804
7	北海道	札幌市教育文化会館大ホール	6	0	0	6	6 [4]	1,100
		札幌市教育文化会館小ホール	[4]	0	0	[4]		[360]
7	神奈川県	藤沢市民会館大ホール	6	0	0	6	6	1,380
9	広島県	JMS アステールプラザ 大ホール	5	0	0	5	5 [5]	1,200
		JMS アステールプラザ 中ホール	[2]	0	0	[2]		[547]
		JMS アステールプラザ 多目的スタジオ	[3]	0	0	[3]		[—]
9	長野県	まつもと市民芸術館主ホール	5	0	0	5	5	1,800
9	神奈川県	テアトロ・ジーリオ・ショウワ	3	2	0	5	5	1,367
合計 / 総上演回数		—	148 [12]	7	3	158 [12]	158 [12] /336 [608]	—

* 1 各会場の 1 回あたりの客席数は、オーケストラピット設営の有無、使用形式にかかわらず、最大値とした。

* 2 同じ公演回数の場合、客席数の多い順に掲載した。